



Pinnacle of Elegance

[特別展]

鍔の華

たがね

はな

根津美術館
NEZUMUSEUM



— 光村コレクションの刀装具 —

Sword Fittings of the Mitsumura Collection

刀装具とは、刀剣外装(拵)の金具です。江戸時代以降に装飾性が増し、金属とは思えないほどのきらびやかで細密な作品が作られました。

明治時代の実業家・光村利藻(号・龍獅堂 1877-1955)はそうした刀剣・刀装具の技術に魅せられて3000点以上にのぼる一大コレクションを築きました。また、武士の世が終わり断絶の危機にあつた装剣金工や刀匠に積極的に製作を依頼し、その技術を護り伝えることにも寄与しました。さらに光村は刀装具の名品を集めた図録『鍔廻花』を刊行します。『鍔廻花』とは、刀装具の細密美が小さな「鍔」から繰り広げられることにちなんだ、粋な書名です。光村の審美眼で選りすぐった全国の名品を当時最先端の写真技術で撮影し、調査に基づく豊富な情報を添えて編纂された同書は、刀装具研究の礎となりました。

その後コレクションは明治42年(1909)に光村の手を離れ、一括して初代根津嘉一郎(1860-1940)の蔵するところとなりました。現在も根津美術館には約1200点が伝わり、依然としてわが国最大級の刀装具コレクションとなっています。

今回の展覧会では、光村コレクションの作品を中心に、美術品としての刀装具の魅力を紹介いたします。光村利藻の足跡と彼が魅せられた美の世界を、刀剣や絵画資料等も交えた約130件の作品でご覧ください。

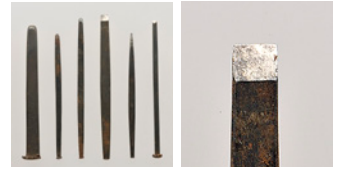


2017年11月3日(金・祝)～12月17日(日)

【休館日】 毎週月曜日

鍾馗鬼図大小鐺 松尾月山作 江戸～明治時代 19世紀 根津美術館蔵(光村利藻旧蔵)

鑿は、端部を鋤で叩いて文様を作り出す鋼製の道具。四分鑿や魚々子鑿などいくつもの種類がある。刀装具の本を『鑿廻花』と名付けた光村のセンスは、単に完成品の美を称えるだけにとどまらない、製作工程への深い理解に根ざしているといえる。



各種の鑿

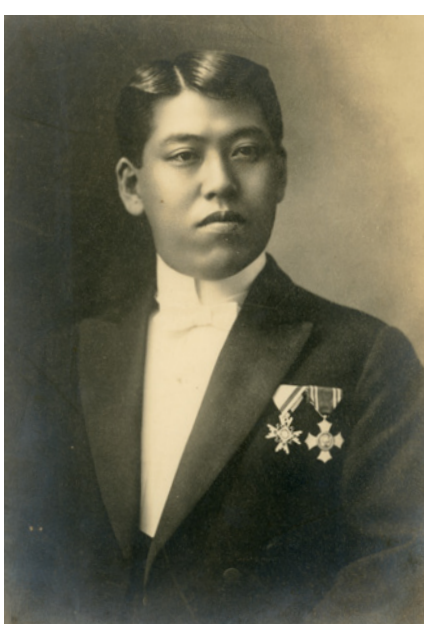
鑿の刀先

鑿の華

— 光村コレクションの刀装具 —

序・好事の人・ 光村利藻

明治10年(1877)神戸に本拠をもつ裕福な海運業者の子として大阪に生まれた光村利藻(1955)は、当時最先端の写真技術を学び若くして美術印刷業を興しました。



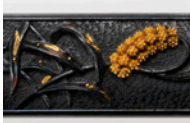
明治40年(1907) 光村利藻30歳

1. 稀代の刀装具 コレクション

20代の頃から蒐集した刀装具は30000点を超えましたが、明治42年(1909)に光村の手を離れ、初代根津嘉一郎(1860-1940)が蔵することとなりました。今もわが国最大規模の刀装具コレクションです。



栗穂図大小揃金具 荒木東明作
彫金・赤銅地
日本・江戸時代 19世紀
個人蔵(光村利藻旧蔵)



小柄(部分 拡大)

幕末の京金工・荒木東明(1817-70)は、たわなに実る栗穂の粒を表す彫金方法を考案したことで名高い。東明は多数の栗穂の作品を残しているが、この作品は、赤銅地の漆黒に金の栗穂が鮮やかに映え、東明を代表する傑作である。

2. 出版と展示

— 『鑿廻花』の編纂と
多彩な文化活動

刀装具の素晴らしさを知った光村は、装剣金工が心血を注いだ名品の多くが人目に触れていないことを憂い、得意の写真技術を活かし明治36年に名品図録『鑿廻花』を製作しました。



芙蓉朝顔図目貫 吉田至永作
銘 竹秀舎至永
彫金・赤銅地
日本・明治時代 19・20世紀
根津美術館蔵(光村利藻旧蔵)

朝顔と芙蓉を取り合わせた夏らしい金無垢目貫。装剣金工だった吉田至永(1844-1904)は明治維新後に後藤一乗門下から独立し、造幣局勤務を経て彫金業を開業。光村からの注文も受けていた。

『鑿廻花』

大型名品図録『鑿廻花』は、明治36年から40年にかけて第4冊まで刊行された。写真に加え、装剣金工一人ひとりの人物略伝もまとめ、資料的価値の非常に高い名著となった。





重要文化財

聖衆来迎図大小揃金具 後藤一乗作

彫金・緋銅地

日本・江戸時代 19世紀 個人蔵

京金工・後藤一乗(1791-1876)の代表作。赤く発色する鐔の地板は銅である。明治期には近江の素封家が所蔵していたこの作品を、光村は『藝廼花』第1巻の巻頭を飾る作品に選んだ。華麗で精緻な彫金美が彼の心をつかんだのだろう。



3. 光村利藻とパトロネージ

伝統技術を護ろうという熱意から、光村は自ら発注主となり名工たちに刀剣・刀装具をはじめ、日本画なども製作させました。庇護者としての足跡をご覧ください。

かたな がつさんさだかす

刀 月山貞一(初代)作

銘 明治乙巳季一月元且為
征露戦役旅順陥落記念
應龍獅堂主人需 月山貞一
謹造之并鐔

鍛造・鉄

日本・明治38年(1905)

根津美術館蔵

(光村利藻旧蔵)

阪神間を活動拠点とした光村は、地元大阪の月山貞一(1836-1918)を引き立て、多くの作品を依頼した。この刀は光村の好みか、濃密で華やかな刀身彫刻が施される。



りよどうひんすこづか
呂洞賓図小柄 塚田秀鏡作

銘 應光村利藻君之需・眞雄斎秀鏡(金印) 彫金・臙銀地

日本・明治30年代 19・20世紀 根津美術館所蔵(光村利藻旧蔵)

光村の注文作には名画に依拠した物が多い。これは室町時代の水墨画「呂洞賓図(雪村筆)」を金属で再現した意欲作。姿形は雪村画に忠実だが、男の顔を赤らめるのは塚田秀鏡(1848-1918)の創意である。

なみあしまたまあいくわいしらすえ
波葦蔀絵合口拵
かのりなつ
加納夏雄・

柴田是真合作

日本・江戸時代 19世紀

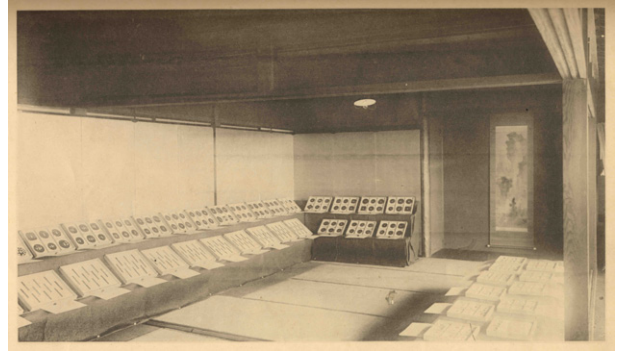
根津美術館蔵

(光村利藻旧蔵)

柄を砂浜、鞘を海に見立て、目貫で岩場に潜む蟹を、青海波塗りで海原をあらわした洒脱な拵。名工、加納夏雄(1828-98)と柴田是真(1807-91)による合作。

コラム② 光村刀剣会の壮大なスケール

光村利藻は明治30年代後半に、神戸の自邸に数百人の賓客を招き、盛大な刀剣会を開催した。ジャンル別に驚くべき量の刀装具が並べられた陳列室は複数にわたり、それ以外に、銘を隠した刀剣の作者を当てる鑑定会を行うための部屋もあった。また場内には煎茶席も設けられ、長唄、義太夫節の披露といった余興にも余念がなかった。



『光村刀剣会陳列品』より

同時開催

展示室 5

国宝 根本百一羯磨

奈良時代には、一切の仏教聖典を写す、一切経の書写が度々行われました。白鶴美術館所蔵の「根本百一羯磨」巻第五と当館の巻第六は、今更一部一切経に属します。「百一羯磨」は全10巻で、巻第五と巻第六を除いた8巻は、正倉院聖語蔵に伝わっています。奈良時代における一切経書写事業の一端をご覧ください。

(右)

重要文化財

根本百一羯磨 巻第五

(今更一部一切経)

紙本墨書

日本・奈良時代 8世紀

白鶴美術館蔵

(左)

国宝

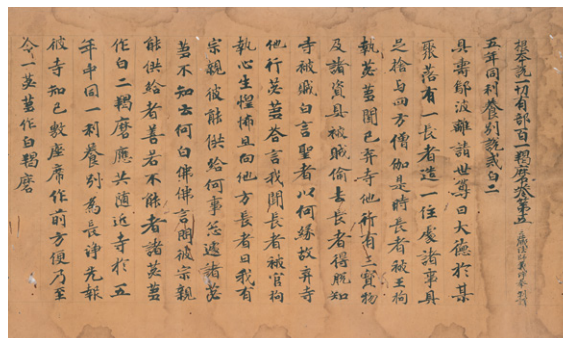
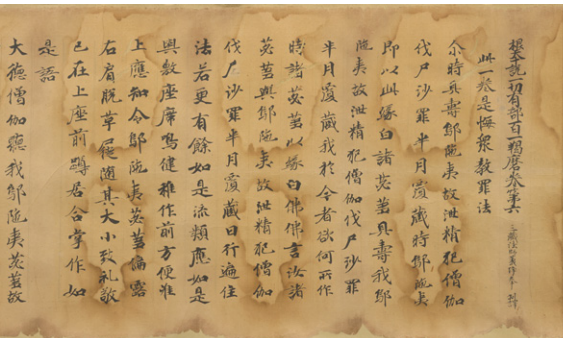
根本百一羯磨 巻第六

(今更一部一切経)

紙本墨書

日本・奈良時代 8世紀

根津美術館蔵



展示室 6

歳暮の茶

年の瀬の忙しいなか、一年の労をねぎらいながら一服の茶をいただく歳暮の茶会。本年を締めくくりにふさわしい茶道具約20件を取り合わせます。

大海茶入 銘 節季
瀬戸 施釉陶器
日本・室町時代 16世紀
根津美術館蔵

「大海」は扁平に膨らんだ胴に、広い口をもつ茶入のこと。年末を意味する「節季」の銘があるこの茶入は、歳暮の茶会に最適の道具といえる。



関連プログラム

講演会

「光村利藻が残したものの―美術品としての刀装具」発見

日時 12月2日(土) 午後2時〜午後3時30分

講師 内藤直子氏 (大阪歴史博物館 学芸課 学芸第2係長)

落語を聴く会

演目 「金明竹」^{きんめいしゆく}、「浜野矩随」^{はまののりゆき}

日時 12月15日(金) 午後3時〜午後4時30分

出演 立川談慶氏(落語家)

会場 いずれも根津美術館講堂 定員130名

〈申込方法〉

当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者1イベントにつき1枚)に参加を希望されるイベント名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1 根津美術館講演会係宛にお送りください。

※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

スライド

レクチャー

担当学芸員が展覧会の見どころをスライドを用いて解説いたします。

11月17日(金) 「鑿の華」

講師 内藤直子氏(同右) / 松原茂(当館 学芸部長)

11月24日(金) 「国宝 根本百一 桐磨と光明皇后御願經」

講師 福島洋子(当館 学芸員)

会場 いずれも根津美術館講堂 定員130名

※各回とも午後1時30分より45分間程度。開始の15分前より開場

※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。

特別催事

「現代茶人の茶席」

11月25日(土) 堀畑裕之氏、関口真希子氏 (服飾ブランド natohu デザイナー)

12月2日(土) 大角幸枝氏 (金工作家 重要無形文化財保持者(鍛金))

12月7日(木) 川瀬忍氏 (陶芸家)

※詳細が決まり次第、ホームページ・本催事チラシにてお知らせします。

三館合同キャンペーン「技と美―秋の三館美をめぐる2017」

三井記念美術館 特別展「驚異の超絶技巧―明治工芸から現代アートへ―」【9月16日(土)〜12月3日(日)】

五島美術館 特別展「光彩の極み―瑠璃・玻璃・七宝―」【10月21日(土)〜12月3日(日)】

根津美術館 特別展「鑿の華―光村コレクションの刀装具―」【11月3日(土)〜12月17日(日)】

※詳細は右記各館のホームページ・本キャンペーンチラシをご覧ください。

開催概要

展覧会名 特別展「鑿の華―光村コレクションの刀装具―」

主催 根津美術館 / 文化庁(平成29年度重要文化財等公開促進事業)

開催期間 2017年11月3日(金・祝)〜12月17日(日)

開館時間 午前10時〜午後5時

「入館は午後4時30分まで」

休館日 毎週月曜日

入館料 一般1300円(1100円)

学生1000円(800円)

※○内は20名以上の団体料金、中学生以下は無料

前売券 一般1100円 学生800円

※2017年9月14日(木)〜10月22日(日)

「ほとけを支える―蓮華・靈獸・天部・邪鬼―」展開催期間中、根津美術館ミュージアムショップにて販売

アクセス

地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線

〈表参道 駅下車A5出口(階段)より

徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター

より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分

住所 〒107-0062

東京都港区南青山6-5-1

電話 03-3400-2536(代表)

ホームページ <http://www.nezu-muse.jp>

*以下の日程で各会場に巡回します。

(展示内容は各会場により異なります。)

大阪歴史博物館 2018年1月27日(土)〜3月18日(日)

佐野美術館 2018年4月7日(土)〜5月20日(日)

秋の庭園

作品のご鑑賞とともに、庭園の紅葉もお楽しみください。



次回展

墨と金

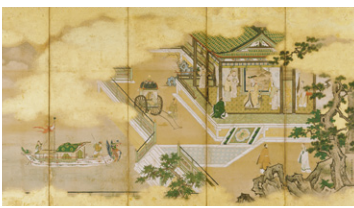
―狩野派の絵画―

2018年

1月10日(水)〜

2月12日(月・祝)

日本絵画史上最大の流派 狩野派の作品を、大画面の屏風を中心に、ご覧いただきます。



両帝図屏風 狩野探幽筆

日本江戸時代寛文元年(1661) 根津美術館蔵